

# 愛知県畜産総合センターだより

(平成25年7月)

## センターの自給飼料生産について

ここ数年の飼料価格の高騰・高止まりを反映し、都市部の酪農家においても自給飼料生産への関心が高まっていると聞きます。最近の円安で自給飼料生産を考える農家さんも多いと推察します。センターでは、開場以来、自給飼料生産を続けており、よい機会なので近況を報告します。

センターでは、イタリアライグラス等牧草類とトモロシ・ソルガム類の2種類を作付けし、それぞれロール、細断ホークロップとして収穫・サレージ調整しています。10haの飼料畑で、700t(生草換算)の自給飼料を収穫する計画です。成牛1頭当たり14aの作付けで、粗飼料全体の40%を自給する目論見です。しかしながら、全国的な獣害拡大の例に漏れず、ここ数年はイシと悪戦苦闘しております。

以前は被害らしい被害はありませんでしたが、3年前の秋、天候に恵まれ順調に生育したトモロシ・ソルガムの実が熟した直後、僅か2~3日の間に全てが押し倒され、数十トの収穫が泡と消えました。それ以降は頻りにセンターに出没するようになり、地元猟友会に有害獣畜駆除を依頼し、岡崎市にイシ捕獲用おりを設置してもらいましたが、毎年10頭以上の捕獲に関わらず次から次へと新しいイシが侵入し、被害が治まりません。畑だけでなく、牛舎周辺においても被害を受け、保管中のラッピング・サレージが荒らされ、イシの寝床材として使われていました。

2年前には、イシを避けるためエンバク等の作付体系に変更しましたが、トモロシの作付中止による全体収量の落ち込みは大きく(前年比79.1%)、不足分の牧草購入費のやり繰りに苦労しました。収量回復にはトモロシ作付を復活させるしかなく、昨年、放牧の盛んなニュージーランドで普及している恒久型電気牧柵を圃場設置することとしました。2mm径の剥き出しの電線(フェンシングワイヤー)を3段組で設置し、常時8,000ボルトの電圧をかけておくもので、取り外し困難ですが耐久性には優れ、十年単位で継続使用できます。電気ショックの記憶を喪失させないよう夜間やオシーズンも恒常的に牧柵に通電しなければならず(消費電力は小さく、休まず通電しても年間300円程度の電気代)、一定の衝撃を確保するために漏電させない管理(草刈り等)も不可欠ですが、設置後にはイノシシ被害がなくなり、減収分も回復できました。今年は電気牧柵の設置圃場を更に増やし(全体の25%)、イシ対策を充実することで、自給飼料の増産を目指しております。



輸入粗飼料の価格が高騰し、各地で自給飼料生産の取組が強化されています。知多半島では、農家主体の取組だけでなく、民間業者が、遊休農地の集積活用による細断型トモロシサレージ生産を開始し、酪農家との連携構築を進めようとする新たな動きがあります。県内に自給飼料の生産技術の担い手が少なくなったこともあり、センターも現場に招かれる機会が増えています。